
ショート☆ショート★Story☆

デンジャラス☆じ～さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ショート☆ショート★Story☆

【Nコード】

N4492B

【作者名】

デンジャラス☆じくさん

【あらすじ】

いつかの時代。いつかのお話。ある町に、一人の女の子がすんでおりました。一人で。夜、目がさめて、そこで少女が見たものは！
?!?・・・ものすごく短く短い連載ショートストーリー☆

はじまり（前書き）

この物語はフィクションです。実際に登場人物がどこかにいたり、町があったりなど、あるわけないので安心して見てね♪では、どうぞ。

はじまり

・・・ゆっくりと目が開いた。
まだ、部屋の中はまっくらで。

「はぁ・・・」

もう一回寝ようかな・・・

そう思い、布団に潜ろうとしたら。

背中に違和感を感じた。

何かがある。うしろに。

恐る恐る、自分がさっき寝ていたところを見る。

「な、なんじゃこりゃあぁー!？」

きっかけは運命。

出会いも運命。

この世はすべて運命である

—The world is destiny—

はじまり（後書き）

はじまりました。初連載。更新は短い話なので結構またせないつもりです。が、保証はじまりできませんのであしからず。それでは、また後ほど。

自己紹介（前書き）

ショートストーリーのつづきーらあよ☆では、どぞ。

自己紹介

A 20x20 grid of dots. The dots are arranged in 20 rows and 20 columns. The dot at the bottom right (row 20, column 20) is missing, leaving a gap.

・
・
・うるさいなあ
・
・
・

誰だよ、僕んちでこんな夜中に大声だして。
近所迷惑もいいとこだよ。

僕はゆっくりと目を開けた。

たぶん、めっちゃくちゃ陰い顔で。

そして、すぐに目を見開いた。

目の前に、寝間着姿の女の子。年は、僕より少し大きいくらいかな？ 15、6 ってところ。

綺麗な肩まである長い茶髪に、とても綺麗に澄んだ瞳の少女が、僕を見て何かわめいている。

「……どちら様？」

僕は、とりあえず、聞いてみた。

すると、彼女は、

「それは、こっちのセリフよ！人んちの、しかも人がさつきまで寝

てたところにいきなりあらわれて!! ふざけないでよね!! あんた
一体誰なのよ!?!」

可愛い気のある顔からは想像もできない程、口の悪い人だ。
ちよつと怖い。

「僕は、ルイ。よろしく。で、あなたは？」

冷静に、極めて冷静を装って、彼女に聞いてみた。

「なあにがよろしくよ! わけわかんないわねえ!?! あたしはリリ
アよ! 憶えときなさい!! で、あんた家に何しにきたのよ!?!」

リリアさんは弾丸のどく早口で僕を攻めたてる。

「僕は・・・あれ・・・? ここ・・・ってどこですか?？」

「ええええええええええ!?!」

近所迷惑なはずの声が、辺り一帯に響きわたった。

あなたに出会えた。

何故かは知らない。あなたとはなした。

何故かは知らない。

僕はまだ、あなたを知らない。

— I don't know you —

自己紹介（後書き）

いかがでしたか？ っていうか、まだ全然話が進んでいないので、なにこれ？ 見たいな人いるかもしれません。これからだんだん進んでいきます。見てくださいね♪ それでは、また後ほど。

オムライス（前書き）

どんどん話が進みます・・・それでは、どーぞ☆

オムライス

この子、なんなの一体!?

自分がどこにいたかも知らないなんて・・・。
どうかしてるわよ! ホントにもうつ。

「・・・と、とりあえず、あたしは眠いから寝たいんだけど・・・
」

と言うと、正体不明の、
あたしより1つ2つ年下に見える綺麗な金髪のボサボサ頭をした、
緑色の瞳をした少年、ルイはあたしにこういった。

「いいですけど・・・僕はどうすれば?」

と首を傾げてくる。

「どうって・・・一緒に寝るしかないわね。布団はこれしかないし。
いいわね?じゃ、おやすみー」

そして大きめのダブルベットの半分を空けて、あたしは寝たの。
朝起きてから、色々聞こつと。

・・・

目覚めた時には、隣にルイはいなかった。

急いで1階に降りて、ルイを探した。

「あっ、おはようございます。お腹がすいたので、勝手に使っちゃいました。リリアさんの分もあるので、食べましょう?」

あたしの我慢は限界に近付いてきた。

ドスツと椅子に座り、ルイの作ったオムライスを、食べた。

「・・・!!」

・・・なに、この味・・・

「うんまああああああいつ!!」

「喜んで貰えて、嬉しい、です。」

ルイは笑ってた。

つと。あたしは突然閃いた。

「よし! 決めた!! ルイ、あんたここで料理長やんない? 決して悪い話じゃないと思うんだけど。」

「えええ・・・?」

彼は力なく不満の声をだした。

「なによ？文句あんの？文句あるならいつてみなさいよ!？」

あたしが歩みよると、

「いえ。やります!やらせてください・・・」

とルイがいった。

「じゃあ、きつまり☆それじゃあ、頑張っていきましょうね!？」

「おっ、おっおっ。」

拳を高く掲げて、やる気なさそうに呟いた。

運命が変わった。

道を間違えた。

後戻りできなくなった。

— D o n ' t g o b a c k —

オムライス（後書き）

いかがでしたか？またまた展開遅っ。なんとかペースをあげなければ。それでは、まだつづくので、よろしく。それでは、また後ほど。

作戦会議（前書き）

続きいつきまあす☆

作戦会議

その日の夜。

リリアさんが

「作戦会議よ」

といって、僕を広い部屋へ連れていく。

「それじゃあ、まず、あなたはなにが作れるの？」

僕は、いつもつくってる料理を言っていた。

「オムライス・・・チャーハン、スパゲティ、後、それから・・・」

「・・・あんた結構凄いわね。こんなにたくさん。」

リリアさんが持つ紙には、ぎっしりと文字が羅列されていた。

「一人暮らしだったもので・・・自然に覚えていきました。」

そう僕が言くと、リリアさんは驚いた顔をして、

「ひ、一人で暮らしてたの?! あんた!?!」

「ええ、一応・・・僕の両親は、僕が八歳の時に事故で死んで、それから親戚にひきとられたんです。でも、その親戚は僕が邪魔だったらしくて、一軒家を丸々僕に暮れて、

「そこで一人で暮らしていけ」

って。それから一人暮らしですね。」

リリアさんは、

「若いのに大変だったのねえ」

と涙を流している。

「案外楽しいもんでしたよ？家の中で何をしてもいいんですから。そういえば・・・リリアさんはご両親と一緒にすんでないんですか？」

僕のその質問に、彼女は若干眉を潜め、澄んだ瞳に怒りの炎を灯した。

「あたしは今家出中なの！家の親はホント最低よ！！だから家を出てきたの！もう5年以上たったかな・・・？とにかく！ほんとにぶん殴ってやりたいくらい憎いわ！！！」

そういつて、テーブルを拳で殴った。

僕は恐ろしい人と出会ってしまったようだ。

「結局、何もできなかったわね。もういいわ、寝ましょ。おやすみ・・・」

とソファにそのまま寝てしまった。

「そこで寝るんすか？」

「グーグー・・・」

寝んのはやっ！！

もういいや・・・ベット勝手に借りちゃお☆おやすみなさい・・・

— まだ、始まったばかり。
j u s t s t a r t i t !
—

作戦会議（後書き）

どうですか？微妙ですか？なにはともあれ、四話目です。ここまでで、まだ出会ってから二日しかたっておりません。まあしかたないということで。楽しみな人も楽しめない人も、次もちゃんとみてください。それでは、また後ほど。

☆ドキドキ☆(前書き)

どんどん進んでこー。この作品はフィクションですよ。

☆ドキドキ☆

遠くで、ずっと遠くで、誰かが泣いている。
さみしそうに。とても。

泣いているのが誰なのか知りたくて、あたしは立ち上がろうとした。
でも。たてなかった。

体が、動かない。

そのうち、泣き声が近付いてきて。

ずっと先に見えた後ろ姿は

「ルイ？」

ゆっくりと目を開けた。

部屋は真っ暗で、ルイはいないみたいだった。

目覚まし時計を手探りで見つけて、時間をみたら、まだ夜中の2時
くらいだった。

あたしは、ルイの事が気になって、月明かりを頼りに二階のあたし
の部屋に向かった。

あたしのベッドで。

勝手によそ者が寝てる。

「ニシシシ・・・」

脅かしてやろうと笑いを堪えながらベッドにゆっくり近付く。

耳元で大声を出そうとしたけど。やめた。

寝ているルイの顔にみとれてしまったからだ。

「綺麗な顔してるわねえ・・・。」

そんな事を一人呟くと、なんだか急に恥ずかしくなってしまうて、

あたしはそのまま一階にダッシュで降りて、また布団にくるまったの。

何・・・ドキドキしてんだろ。あたし・・・。

そういえば、この布団いつの間に掛けられたんだろう。

あいつがどこから来たのかすら、あたしにはわからないのに・・・。

「っ!!」

わかった! 夢の中でルイが泣いていたのは、きっと家に、元いたところ、帰りたいからだだったんだ。

「よし・・・。」

あたしの中で、また新しい決心が産まれた。
とりあえず・・・おやすみ・・・。

夢の続きを。

— I n d r e a m —

☆ドキドキ☆（後書き）

いかなもんすかね？なんか、まだまだへボいかもしらんけども・
なんとか最後までもっていきたいっす☆では、また、後ほど。

さあいっうー！(前書き)

続きをどうぞ☆

さあいいうー！

次の日の朝。僕はボサボサの髪の毛を掻きながら、布団から出た。

「ふあああああーあ」

大きく口を開けて、情けない声の欠伸をしてしまった。

さてと。リリアさんを起こしに行こう。

一階に降りていくと、まずびっくりしたのはリビングの食卓テーブルにご飯がたくさんのもったこと。

そして、それを恐ろしいスピードで食い荒らしている人間が、リリアさんだったと。

「お・・・はようございます。・・・今日は早いですね。。。」

僕はとりあえず朝の挨拶をした。

「アっ。ふうい。ふおあふおう。ふおれふおお。」

と口一杯にご飯を含みながらなにかを喋り、僕の目の前にぼんつ。とご飯をだしてくれた。

「あ、ありがとう・・・ございます・・・いただきます・・・」

何も言わず、食べ始めた。

「ふいー。ごちそうさま。お腹いっぱいだわ、あたし。」

そういってお腹をポンポンと叩く。

「そうですか・・・。」

と僕はてきとくに話を聞いていた。

突然、

「あつ、そうだルイ。あたしかんがえたんだけどき……。」

「？」

僕は首を傾げた。

「あなたを、元いた所へ帰してあげようと思うんだけど……どう？」

何をいきなり。

とは、口が裂けても言えない。

「ぜひ、そうして頂けるなら。」

内心、帰りたいとは思っていたから。

この機会を逃すわけにはいかなかった。

「やっぱりね。じゃあそうしましょ。」

リリアさんは微笑んでさういう。

「でも、どうしたら帰れるか、わかるんですか？」

と、素朴な疑問。

この質問に彼女はあっさりと、

「知るわけじゃないじゃない。だから、これから探しにいくんでしょ。」

あーなるほど。

マジですか？

「どうやって？」

「決まってるじゃない。旅に出るのよ。歩き回ってたら、その内あなたの知ってる所につくかもしれないし。」

すんごいアバウトな探し方ですね。

なあんて言葉にしてたら、きっと死んでたな。

「はぁ・・・わかりました。」

めんどくさいけど、帰れるなら、仕方ないか。

「よし。じゃあ支度しなさい。すぐ出るわよ。」

「ええっ！？今から！？」

思わず驚いてしまった。

「もちろんよ。早い方がいいでしょ。」

僕はとりあえず、コップの水を飲み干した。

「準備オーケー？それじゃ、行きましょ。」

「まず、何処へ向かうんですか？」

彼女は、少し考えて、

「ちょっと、やっぱり二人じゃ心細いから、あたしのけらい・・・
じゃなくて！友達を誘って、手伝って貰いましょ。」

けらい・・・今けらいっていったぞ？この人・・・。

「わかりました。その人は何処に住んでるんですか？」

「この坂道の、いちばあん下にある、お屋敷に住んでるの。いきま
しょ。」

僕は、楽しそうにはしゃぐ彼女の後ろを、とぼとぼ歩いてついて
いった。

— Let's
trip! —

旅をしよう。

さあいこう！（後書き）

いかがでしたか？今回の話、少し長くなりましたが・・・まあ、どんなまい？・・・いよいよ、これからが大変です。旅にでちゃいましたからね。がんばるお☆それじゃ、また後ほど。

不幸な僕の話（前書き）

新メンバー登場！！続きをどうぞ☆

不幸な僕の話

僕はナツキ。この街じゃ、けっこういいところに生まれ、住んでいる。妹はハル。僕より2つ歳が離れてる。

父さんと母さんも優しく、僕達家族四人、仲良く暮らしてた。
・・・5年前までは。

街に一人で引っ越して来た、僕と同じ歳の女の子。

綺麗な長い茶色の髪に、綺麗な瞳。

僕は、ドキドキしながら、彼女を見つめていた。

・・・そしたら。

「何ジロジロ見てんのよ!? 黙ってつつたってないで、荷物を運ぶの手伝いなさい!!」

「は、はいっ!」

それから、僕と彼女、リリアに、上下関係が生まれ、いろいろなところに使われるようになった。

僕だけならまだしも、

「お兄ちゃんを助けてあげる!!」

といってリリアに向かっていった可愛い妹も、彼女の手中におさまった。

僕の両親は、僕達二人の事で彼女に脅されて、彼女に手を出せない。

ってわけで、僕達家族はリリアに頭が上がらない。

それでも、最近はあるまじうちに乗り込んだりしてこないの、少

し、安心・・・じゃなくて、心配なんだけど。

僕がリリアに頭が上がらないのは、彼女に恐怖心があるわけではなくて、

彼女のことが単純に好きになってしまったからだった。

うちの家族は、多分何考えてるの？って言うてくるだろうけど。

残念ながら、この気持ちは止められない。

いつか、この関係が終わって、もっと親しくなりたいなんて思ってしまうてるわけで。

そんな彼女が、久々に我が家にやってきてこう叫ぶ。

「ナツキィー！！旅にでるわよう！！支度して出てきなさい！！」

君に出会えた事は、僕にとって一番のしあわせ。

—
I
l
o
v
e
y
o
u
—

不幸な僕の話（後書き）

やっと、この作品の主人公以外のメインメンバーを登場させられました。本来なら、二話目くらいには出せたはずなのですが・・・、ショートストーリーということで短く、短く！と思っているうちに、タイミングを逃してしまいました。。ま、そんなわけで、まだまだ始まったばかりのトロトロショートストーリーをどうぞよろしく。では、また後ほど。

子分合流（前書き）

つづきいおどーぞ☆

子分合流

「なっかなかでてこないわねえ・・・」

ああもう！トロイわねえ！！

あたしを待たせるなんて！

あたしはイライラしながら、ナツキがでてくるのを待っていた。

「まあ、いきなりだったんなら、仕方ないじゃないですか？」

あたしの直ぐ隣で膝を抱えしゃがみこんでいるルイがそんなことを言った。

「そんなことないわ！こんのあたしをこんなに待たせやがって・・・！！」

それから五分くらいしてから。ナツキはようやく出てきた。

「ごめんね？リリア。親に引き止められてて・・・。」

そう笑いながらナツキは出てきた。

「遅いわ！！それぐらいすぐ振り払って来なさいよ！！あなた強いんだから」

そう言ったあたしから、ナツキはすぐに隣にいたルイに視線を移した。

「この子は・・・誰だい？」
と聞いてきた。

「ああ・・・こいつ？こいつはルイ。いきなりうちにあらわれて・・・」

「・・・ってわけ。」

「なるほど。」

あたしはこれまでの経緯を懇切丁寧に語ってやった。そして、ナツキは、納得したようにうなずいた。

「じゃあ行くわよ！？ナツキ！！ルイ！！」

あたしが歩き出すと、

「うん！！」

「はい・・・」

と二人はついてきた。

「じゃあ、何処へ向かうんですか？」

ルイの質問に、歩きながら答える。

「まずは、隣街まで山越えよ。そして、隣街の街外れに住んでほしい、魔法使いのおじさんに、はなしてみましょ。」

ナツキが続けて聞いてくる。

「らしい・・・って？」

「行った事ないんだからいるかどうかかわからないじゃない。まっ、なんとかなるわよ。」

そういうと、ナツキとルイは二人で顔を見合わせ、溜め息をついた。

「なあによ！？なんか文句あんの！？？」

あたしが睨みつけると、

「いえっないです！」

「ありません！」

と、二人の声が同時に聞こえる。

「そ。じゃあレッツゴー！」

「オオ・・・」

とかいって、あたし達は東にある山に向かって歩き出した。

旅は道連れ。

— with trip —

子分合流（後書き）

いかがでしたか？まだまだすまないショートストーリー。これから、スピードをあげていけたらなと……。それでは、また後ほど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4492b/>

ショート☆ショート★Story☆

2011年1月29日14時22分発行